

# 岩瀬文庫へのいざない



昭和初期の岩瀬文庫の全景と正門(囲み)。敷地内には園遊会を催すことのできる庭園、猿舎、児童館などを備えていました

西尾市岩瀬文庫は、明治41年に実業家・岩瀬弥助が「地域文化の向上と古い書物の継承」を願って、独力で設立した古典籍主体の私立図書館がその始まりです。蔵書は開館当初からあらゆる人に無償で公開され、美しく堅牢な赤煉瓦の書庫は文化のシンボルとして今も愛され続けています。この8月7日には、皇太子さまが岩瀬文庫を訪問され、展示室で貴重な古典籍などを鑑賞されました。

今号では、岩瀬文庫のこれまでの歩みと取り組み、文庫で活躍するボランティアなどを紹介します。

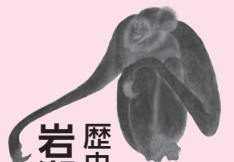
## 弥助がつくり、市民が守った岩瀬文庫

岩瀬文庫は今から108年前の明治41年5月6日、市内の実業家・岩瀬弥助が「地域文化の向上と古い書物の継承」を願って、独力で設立した古典籍主体の私立図書館としてスタートしました。

当時、都市部を中心に図書館の設立が検討されたり、お金持ちが希少なや書画骨董類を収集したりする傾向にあったようですが、岩瀬文庫のように地方の一個人が、広く一般の人々を対象とした無料で利用できる公開文庫を設立したのは、まれなことでした。

閲覧室はもとより、講堂や音楽堂、遠来の閲覧者のための宿泊施設、さらには婦人専用閲覧室や児童館、遊具を備えた庭園や池水など、岩瀬文庫は弥助の進歩的な構想によってつくり上げられた、優れた総合文化施設でもありました。美しく堅牢な赤煉瓦の書庫はそのシンボルとして、今もなお愛され続けています。

戦後、文庫の運営が困難になった時、散逸を憂い、当地での存続を願って文庫を守ろうとする市民運動が起こりました。それに応え、昭和30



## 歴史でみる 岩瀬弥助と岩瀬文庫

慶応3年 岩瀬文庫創設者の岩瀬弥助(以下、弥助と表記)が西尾町須田に生まれる

明治21年 矢島貞廉らが結成した勉強会「談話会」に参加

明治31年 西尾町長に就任。このころ、肥料商として幡豆郡内一の資産家となる

明治36年 このころ、文庫設立を構想したといわれる

明治37年 文庫設立のため多量の本を買い集め始める

明治39年 文庫開設を表明

明治40年 文庫の本格的工事の一方、日本各地の図書館を視察し、設計を変更。予定した弥助の誕生日(10月6日)に文庫完成ならず

明治41年 5月6日、岩瀬文庫開館。蔵書数は約2万7500冊

明治42年 西三軌道(後の西尾鉄道)株式会社発起人総会が岩瀬文庫で開かれ、社長に就任

大正3年 文庫の蔵書数4万3000冊

大正4年 文庫拡張と書庫など新設のため文庫を一時閉館

大正10年 文庫の改装と書庫の新設が完了し、文庫を再開館

大正15年 児童館が完成し、弥助の文庫の建設構想が完了

昭和4年 体調が悪化。文庫を財団法人にするための遺言書を書く

昭和5年 死去。享年63歳

昭和6年 文庫が財団法人となる

## 西三河を代表する実業家・岩瀬弥助

岩瀬文庫の創設者である岩瀬弥助は、慶応3(1867)年10月6日、旧西尾城下の須田に生まれました。幼名は吉太郎といい、20歳の時に本家筋の肥料商「山本屋」の入婿となり4代目岩瀬弥助を襲名しました。旧西尾藩士の矢島貞廉らが結成した勉強会「談話会」で法律や経済、社会問題などを学び、事業をめざましく拡大し、西三河を代表する実業家となりました。商才に長け、一代で莫大な財を築き上げますが、自身は質素な暮らしぶりであったと伝えられます。西尾町長や西尾鉄道の初代社長などを務める一方で、学校建設や慈善活動のために多額の寄付を行うなど、西尾の教育や福祉へも大きく貢献しました。



年4月、西尾市が文庫を引き継ぎました。弥助の願いが、見事市民に受け継がれたのです。

三河地震で倒壊し、そのままであった文庫本館跡地に木造の図書閲覧室を作り、昭和30～40年代には「猿のいる公園」として子どもたちも楽しむことのできる憩いの場所になりました。しかし、岩瀬文庫の蔵書を中心として出発した市立図書館も、多様化する情報時代に応えるため、新刊本中心の現在の市立図書館へと移行し始めました。昭和58年、市立図書館の新館建設後は、図書館から「岩瀬文庫」の名称が消滅し、ひっそりたえず書庫だけが市民にとつての岩瀬文庫のイメージとなっていたのです。

### 日本初の古書ミュージアムとしてリニューアル

平成6年、岩瀬文庫を市民の文化的財産として見直そうという機運が高まり、市は図書館から教育委員会の文化財担当へ文庫の管理を移し、「西尾市民の文庫」であるとの宣言を含め、名称を西尾市岩瀬文庫と改めました。

平成11年から、より良い状態で蔵書を保存し、多くの方が利用しやすい環境を整えるため、市は岩瀬文庫の再整備事業に着手。旧書庫の西隣に最新設備の収蔵庫を、かつての本館があった位置に再び岩瀬文庫本館を建設し、平成15年4月、日本初の

古書ミュージアムとしてリニューアルオープンし、現在に至ります。

新しい岩瀬文庫は、日本の豊かな書物文化との出会いの場でありたいという希望が込められた施設です。閲覧室で本物を手に取り、その本が重ねてきた長い時間に想いをはせながら読むことができます。このほか常設展示や多彩な蔵書を生かした企画展示を通して、書物の文化史や古書の面白さを楽しく学ぶこともできます。展示と連動して開催される講座や講演会、にしお本まつりなどは、楽しみながら「先人の知の集積」である書物に親しむきっかけとなることでしょう。

### 文庫設立を記念して 伊文神社に石灯籠を奉納

岩瀬弥助が文庫設立を祈念して伊文神社に奉納した石灯籠が、今もなお伊文神社拝殿の東側にたたずんでいます。灯籠には「私は以前、いつか文庫を設立し、自分だけでなく他人にも書物を提供し、そのことによってそれらの書物を未来永劫に伝えたいという願いを抱きました…」から始まる文庫設立の決意が漢文で刻まれています。



昭和12年 日中戦争がはじまり、飛行機製造のため、法人基金を国家に献金したことから、財団法人の機能を維持することが困難になる

昭和20年 三河地震でこの地は大きな被害を受けるが、赤煉瓦の書庫は無事で、蔵書は守られる。4月、本館と付属建物が売却され、書庫と児童館を残すのみとなる

昭和22年 「三河新聞」に「経営難の岩瀬文庫 蔵書買収の申し込み有り 西尾の文化財を手放すな」の記事が掲載される

昭和23年 西尾町民の間で文庫を守るための後援会をつくる運動が起き、岩瀬文庫後援会が立ち上がる

昭和24年 西尾町が岩瀬文庫対策委員会を設置。このころ、愛知県・南山大学・愛知学芸大学が蔵書の買収の下交渉を進める

昭和29年 文庫の土地・建物が財団法人から西尾市へ寄付される。蔵書は一部県への売却が始まるが、交渉の結果、全8万4737冊を市が買い受ける

昭和30年 市立図書館岩瀬文庫となる

平成6年 市教育委員会文化振興課へ移管。「西尾市岩瀬文庫」と公称を統一

平成11年 書庫・児童館(現西尾市立図書館おもちゃ館)が国の登録文化財となる

平成12年 蔵書の悉皆調査始まる

平成15年 日本初の古書ミュージアムとしてリニューアル

平成19年 登録博物館になる

平成20年 創立100周年を迎える

平成28年 皇太子さまが来館



# 学芸員が語る 文庫の魅力

岩瀬文庫には5人の学芸員が配置されています。学芸員は、博物館資料の収集や保管、展示、調査研究などを行う博物館法に定められた専門的職員のことです。学芸員に岩瀬文庫の魅力を聞きました。

—まず初めに、文献史学が専門の新人、村瀬貴則学芸員

文庫の蔵書は誰でも、いつでも、無料で閲覧できます

「博物館・岩瀬文庫の魅力は2つあると思います。1つは、企画展示の内容が毎回幅広いということ。当館の所蔵資料はジャンルが幅広いため、2、3か月ごとに毎回テーマをガラリと変えて企画展示を行うことができます。他の博物館では、なか



なかこうはいきません。展示では、できるだけ簡明に解説し、来館者の興味や関心が広がるようにと心掛けています。ぜひ企画展にお越しください！もう1つは、古書を『18歳以上の誰でも、いつでも、無料で』閲覧できるということ。当館では、貴重な古書を多く所蔵していますが、申請すれば、当日でも所蔵資料を閲覧できます。多くの博物館や資料館、大学では難しいことです。これは、文庫の創設者・岩瀬弥助の『地域に貢献したい』という意向を、100年経った今でも継承しているからです。数百年前の本を手にする機会は少ないと思います。これらは市民共有の貴重な文化財群ですので、丁寧な取り扱いにご留意の上、多くの閲覧をお待ちしています！」

—続いて、入庁3年目、文献史学が専門の青木眞美学芸員

学芸員こんなことやってます

「私たち学芸員の仕事の中で、皆さんの目に触れることが最も多い仕事は企画展示です。年5回、岩瀬文庫の蔵書をさまざまな切り口で展示しています。まずは、テーマを考え

弥助の想いを引き継ぎ、日々業務に当たる学芸員。旧書庫の前にて。



ます。これがなかなか難しいのです。なんとといっても過去60回以上の企画展と重なることなく、魅力が伝わるものを考えなければならぬからです。次に、出品する資料選び。基本的に他館から借りることなく、岩瀬文庫の蔵書だけで賄えます。実はこれはすごいことなんです。ほぼ毎回自館の所蔵物のみで賄えるところは全国的にも珍しいのです。8万冊を越える蔵書の中から40点ほど選びます。その後、写真を撮影し、チラシ

・ポスター・図録・展示パネルの原稿を書き始めます。締め切りが展示開始日のおよそ1か月前。この締め切り前が修羅場です。分かりやすく、楽しんでもらえるように、試行錯誤を繰り返します。そして、展示替え。4日間で本とパネルを並べていきます。見やすい位置、向きなど、考え

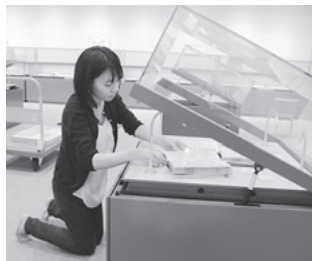
始めるとなかなか定まりません。それらが全て終わると、やっと企画展が始まります。企画展示室の扉を開ける瞬間、つまりお披露目する瞬間の達成感は何ともいえません。会期中は、見学のお客さまの案内や展示解説、講演会や古文書講座など関連講座を担当します。ぜひ皆さん一度、いえいえ何度でもお越しください。そのたびにいろいろな発見や新しい古典籍との出会いがあることでしょう」

—続いては、美術史学が専門のベテラン、神尾愛子学芸員

文庫の蔵書はあちこちのメディアに掲載されています

「岩瀬文庫の蔵書が出版物に掲載されたり、新聞や雑誌などメディア

資料の調査を進める村瀬学芸員。この資料は14世紀に作られたものとのこと。大事な資料に触れる前には手を洗い、腕時計も外します



左／講座の講師を務める神尾学芸員。和装本の作り方を分かりやすく解説します 中／企画展示の準備に余念がない青木学芸員。見やすく、丁寧にレイアウトします 右／企画展で展示解説する鈴木学芸員。知識と話術の見せどころです



で使用されたりする例は、毎年100件を超えます。やはり中心は学術論文や研究書。最近の例では、葛師北斎の師である浮世絵師・勝川春章の生年が17年さかのぼるといふ新説が岩瀬文庫の『画師冠字類考』を根拠として発表され、話題となりました。また、『枕草子』をはじめとする蔵書が、中学校、高校の教科書や副読本にもよく掲載されています。最近増えているのはテレビ番組。『ザ！鉄腕！DASH!!』などさまざまな番組で、突然、西尾市岩瀬文庫所蔵のテロップを見て驚いた方も多いのではないのでしょうか。全国の博物館、美術館の特別展への出品も、毎年10件以上。現在も、東京の森美術館『宇宙と芸術展（29年1月9日まで開催）で、『漂流記集』の虚ろ船が展示されています。ぜひ一度、岩瀬文庫でウェブ検索してみてください。あちこちで活躍中の岩瀬文庫の蔵書に出会えますよ！

—最後に、同じくベテラン、考古学が専門の鈴木とよ江学芸員

**外からでも文庫を楽しむ仕掛けがあります**

「岩瀬文庫を訪れると、古くて難しい本がいっぱいあって…と、なんだか敷居が高い印象があるかもしれませんが、決してそんなことはありません。中に入るのが怖いという方でも、岩瀬文庫を外から楽しむことができる仕掛けがいくつもありま

## 皇太子さまが岩瀬文庫に来館

8月7日、皇太子さまが、8日に名古屋市で開催される第18回結晶成長国際会議の出席と併せて、地方事情視察のため岩瀬文庫を訪問されました。文庫長から施設概要の説明を受けられた後、特別展「新発見。新知見。～新編西尾市史中間報告展Ⅰ～」で展示している国指定重要文化財『後奈良天皇宸翰般若心経』(右)などを学芸員からの説明に耳を傾けながら、熱心に鑑賞されていました。



す。そのうち2つを紹介します。1つ目は『木々に囲まれた池とその周囲』。この池は明治41年に岩瀬文庫ができたときからある由緒あるものです。春は木々の芽吹き、夏は木陰、秋は紅葉と、季節を感じる空間になっています。木漏れ日の中から旧書庫を眺め、いにしへの風景に思いをはせてみてください。2つ目は『館の前の芝生広場と柱状のミニユメント』。ご覧になったことはありませんか？ 岩瀬文庫で所蔵している古典籍の中からセレクトした何点かが描かれています。さらに建物の方を見

渡してみましよう。外壁にも同じような絵が何点かあります。館内に入る前、あるいは見学後に探してみてください。そして、次に来るときには、その本物をぜひご自分の目でご覧ください！

—岩瀬文庫の学芸員は、岩瀬弥助が願った「書物の恒久保存と公開活用」の想いを引き継ぎ、資料を「伝える」「生かす」という2つの理念を柱として、日々の業務に当たっています。ご来館の際には、お気軽にお声掛けください。



# 文庫を支えるボランティア



左／先輩ボランティアが丁寧に和装本の修復作業を教えてくださいました 右上／体験講座「和装本を作ってみよう」では一般の方にも指導しました 右下／にしお本まつりでは参加者に本物の蔵書に触れてもらう体験コーナーを企画しました

## ボランティアの誕生

岩瀬文庫のリニューアルから2年後の平成17年度に「岩瀬文庫ボランティア」は誕生しました。文庫と市民や来館者をつなぐ架け橋として、資料の保存や教育普及活動などに参加し、文庫の活動をより立てること

## なくてはならない存在

ボランティアは、綴じ糸の切れた和装本の綴じ直しや、中性紙保存箱（経年劣化で疲れの目立つ本を保管するための箱）を組み立てて蔵書を行うポスター・チラシの発送作業などを行います。また、講座や催しの受け付けやアシスタント、資料作り、会場設営、子どもたちの学習の講師役などでも活躍し、今では文庫の運営になくてはならない存在となっています。

## にしお本まつり

毎年秋に行われる「にしお本まつり」は、岩瀬文庫ボランティアをは

じめとする、多くの市民が運営の中心を担う手作りのイベントです。岩瀬文庫を100年余にわたって守り伝えてきた西尾を「本のまち」として市内外に広くアピールし、本に対する親しみや関心をより深めてもらうとするもので、平成18年から行われています。

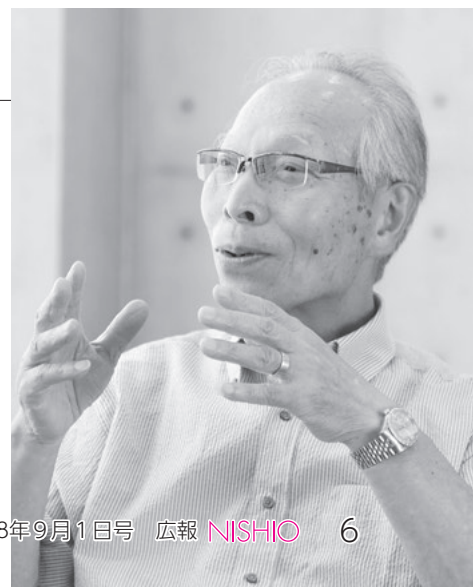
本まつりでは、岩瀬文庫と西尾市立図書館を会場に、岩瀬文庫ボランティアによる展示企画や、地元の本屋が良書をお値打ちに提供する古本市、著名作家などの講演会、本の修理の実演、岩瀬文庫旧書庫内部の特別公開など、「本」をテーマとした企画が盛りだくさん。子どもから大人まで、多くの方でにぎわいます。今年10月29日(土)・30日(日)に開催。詳しくは広報にしお10月1日号の折り込みチラシをご覧ください。

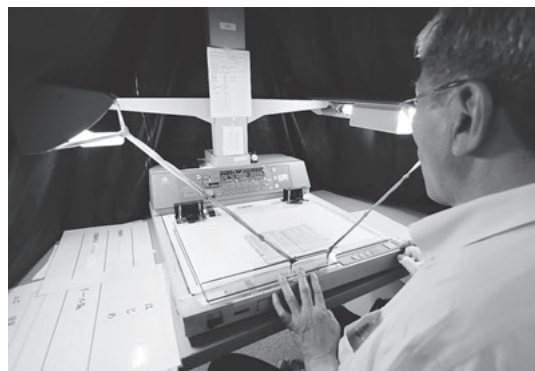


## 楽しみであり、生きがい

岩瀬文庫ボランティア代表 天野進さん

みんなで仲良く、力を合わせて活動しています。メンバーは本が好きの方はもちろん、世話好きな方も多い印象ですね。岩瀬文庫や古書と聞くと、難しそうなイメージを持っている方が多いと思いますが、文庫には崩し字が読めなくても理解できる、易しくて面白い本もたくさんあります。にしお本まつりなどを通じて敷居の高さを払拭し、文庫の価値や面白さをもっと多くの方に知ってほしいと願っています。古書の宝庫・岩瀬文庫に関わり、岩瀬弥助の高邁な精神を次代に引き継ぐ手伝いができること。これが私の楽しみであり、生きがいですね。





左上・右上／収蔵庫内の様子。カビやほこり、臭いを除去する電子フィルターや、調湿・免震機能が整備されています 左下／さまざまな切り口で蔵書を紹介する企画展示には、毎回多くの方が訪れます 右下／万が一の時に情報を残すため、全蔵書のマイクロフィルム撮影を進めています

# 文庫の財産を 後世へ伝える

## 蔵書を伝える取り組み

文庫では、岩瀬弥助の想いを引き継ぎ、貴重な蔵書を後世へ伝えるさまざまな取り組みを進めています。

さまざまなテーマで開催する**企画展示**もそのひとつ。蔵書の多彩さや古典籍の面白さを伝えていきます。9月10日(土)からは「越境する絵ものごたり」を開催します(11ページ参照)。

平成8年度から、全蔵書の**マイクロフィルム撮影**を進めています。

平成12年度からは、名古屋大学大学院文学研究科の塩村耕教授をリーダーとする岩瀬文庫資料調査会により、**悉皆調査**が行われ、岩瀬文庫ホームページで「古典籍データベース」を順次公開しています。調査では、蔵書を一冊残らず調査し、これまでにない『蔵書一冊一冊の内容やプロフィールが分かる』データベースとなっています。

平成13年に完成した**書庫**は、鉄筋コンクリートの二重壁と厚さ15cmの耐火扉、杉材の内壁で内部環境を保護、庫内は一年中適切な湿度に保たれ、蔵書を守っています。

## 知識や知恵を伝える貴重な書物を残して欲しい

岩瀬文庫資料調査会会長 塩村耕さん

文庫には毎週通い続け、もう少しで悉皆調査が終わるところですが、ここまで16年もかかってしまいました。それほど大量の書物がある、おそろべき文庫です。しかも、他にはない珍本が多く、調査は発見の連続でした。江戸時代以来、この三河の地には、書物を大切に、みんなで共有することによって未来に残そうという文化風土があります。岩瀬弥助はそんな精神を見事に受け継ぎ、大きな贈り物を後世に残してくれました。その恩返しとして、われわれの作った書誌データベースが、文庫の活用に少しでも役立つことを願っています。





岩瀬文庫には8万冊余りもの古典籍が所蔵されています。そのジャンルは多岐にわたり、絵図や美しい絵巻物、文学、地誌、中国や朝鮮で作られた書籍から園芸、囲碁など趣味の本まで。膨大かつ多彩なジャンルの蔵書の中から「文庫が誇る蔵書」として、ごく一部をご紹介します。蔵書は18歳以上の方なら誰でも、いつでも閲覧できます。写真ではなく、実物でしか感じられない古典籍それぞれの和紙の手触り、絵の細やかさを、ぜひ体感してください。



# 文庫が誇る蔵書の数々

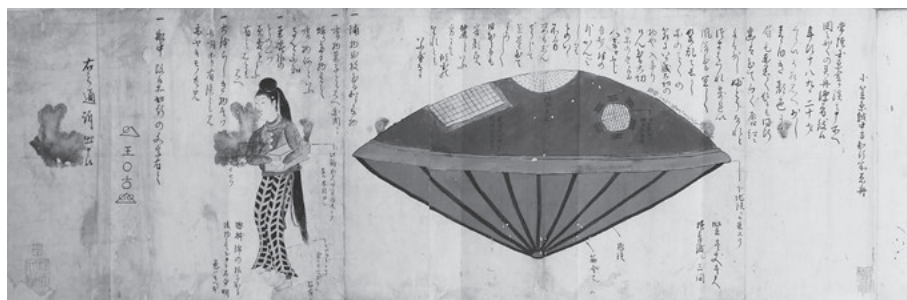
『<sup>おなごふうぞく</sup>女子風俗<sup>けわいひでん</sup>化粧秘伝』(17-36) 3冊／佐山半七丸著／速水春暁齋画／文化10(1813)年／江戸時代の女性のための総合美容マニュアル本。美しくなりたいという女性の願いは、現代も江戸時代も変わりません。欠点カバーの化粧の仕方からボディケアまで、今でも使えるかもしれない江戸時代の女性たちの美容法が紹介されています。画像はなで肩に見せる方法。髪を少し高く結び、左右の肩を気持ち下げるようにします。背を反り、肘を脇腹につけて、すぼめます。襦袢(じゅばん)の襟を前へ出すとなで肩に見えるそうです。ぜひともお試しあれ。



『<sup>ひやくまんたたらに</sup>百万塔陀羅尼』(申-17) 1巻／奈良時代／本書は、日本最古の印刷物とされています。称徳天皇が天平宝字8(764)年の恵美押勝(えみのおし)かつの乱の平定後、鎮護国家を発願して陀羅尼経百万巻を印刷し、それを木製の塔に収め、10万基ずつ十大寺に奉納したものです。本書も法隆寺に収められたものに、感謝状とともに譲渡されました。経文には4種類あり、そのうちのひとつが塔に収められています。虫食い防止のために黄檗(きはだ)で染められた紙に刷られています。



『<sup>まくらのそうじ</sup>枕草紙』(103-164) 3冊／清少納言著／天明2(1782)年柳原紀光<sup>ちとみつ</sup>写／「春はあけぼの…」で始まる、誰もがご存知の随筆文学『枕草子』。本書は公家の柳原紀光が天明2年に写したもので、巻末に記された書写識語(来歴をメモしたもの)をみると、安貞2(1228)年の藤原定家にさかのぼります。紀光は古典文学の本文に異同が多いことを知っており、本書には朱で校合した跡がいくつもみられます。そのため清少納言が書いた『枕草子』に最も近い文章とされ、岩波文庫や古典文学大系の元にされています。現在、皆さんが読んでいる『枕草子』は、当文庫所蔵の作品なのです。



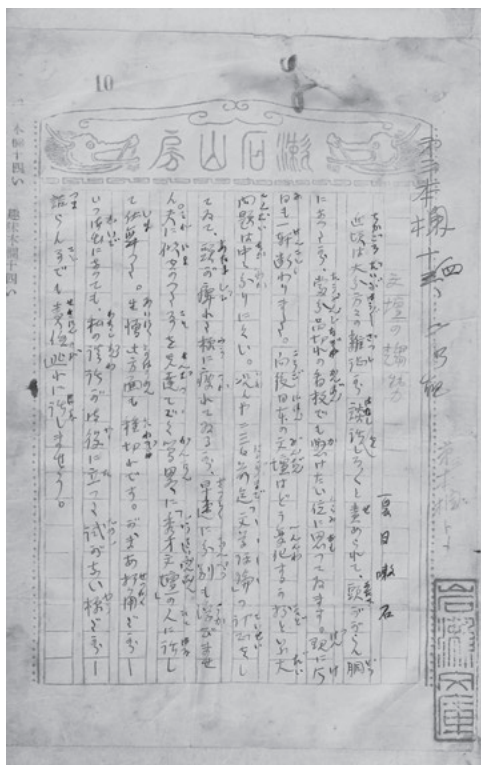
『<sup>ひょうりゅうきしゅう</sup>漂流記集』(136-6) 2冊／万寿堂編／江戸時代後期写／日本へ漂着した異国船や、国外へ漂着した日本人の記事を集めたもの。写真は享和3(1803)年に常陸国に美しい女性が乗った見慣れぬ舟(異船)が海岸に流れ着いたという記事です。滝沢馬琴の『兔園小説』にも「虚(うつ)ろ舟」として取り上げられており、現代のオカルトファンの間でも「江戸時代のU.F.O.」として知られています。



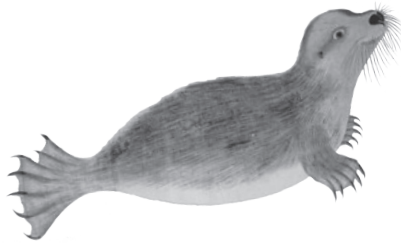
ひゃっきやぎょうのぼ  
『百鬼夜行之図』(午-36) 1巻/江戸時代末期~近代/百鬼夜行、とは、夜道を妖怪たちが行列して練り歩くことです。古道具が変化した付喪神(つくもがみ)、大入道や一つ目小僧などのスタンダードな妖怪、作者の独創らしき妖怪などさまざまに描かれています。武器を手に進む行列の先は武装した神々との合戦となり、最後に妖怪たちは散々に打ち負かされてしまいます。妖怪たちのユーモラスな姿にご注目。



ほんぞう ずせつ  
『本草図説』(45-11) 195冊/高木春山著/嘉永5(1852)年(未完)/市井の本草家・高木春山が、20年以上の歳月と莫大(ばくだい)な財を投じて作成した江戸時代カラー博物図鑑。魚や貝、植物、動物、虫、人間、さらには鉱物まで、当時の自然科学が扱うおよそ全ての自然産品について精緻な写生画を描き、解説を付け、分類するという質・量ともに他をしのぐ、史上最大級の彩色博物誌です。志半ばで春山が逝去したため未完ですが、完成すれば優に200巻は超えていたでしょう。2005年に開催された「愛・地球博」では、ポスターや瀬戸愛知県館の展示に写真が使用されました。写生画の技術の高さに驚きです。



ぶんだん ずせい  
『文壇の趨勢』(136-105) 1冊/夏目漱石筆/明治42(1909)年/かの有名な文豪、夏目漱石の自筆原稿。今後の日本文壇の動向を論じています。文芸雑誌『趣味』4巻1号(明治42年1月1日発行)に掲載されました。本稿は談話筆記(インタビューの内容を記事にしたもの)ですが、記者が書き起こしたものが気に入らず、漱石が自筆で書き直したものと推測されています。「漱石山房」と印刷された原稿用紙を使用しています。



地域文化の向上と古い書物の継承を願って弥助がつくり、その想いを受け継ぎ、市民が守ってきた岩瀬文庫。今も書物の閲覧のほか、蔵書を生かした企画展示や常設展示、「にしお本まつり」など、多くの人々が集います。文庫のシンボル・赤煉瓦の書庫— その美しく堅牢な建物の前では、今日も弥助の銅像が“日本の書物文化との出会い”の入り口を開けて市民を迎えています。